

麦中期講習会資料

令和7年1月20日

西部農業事務所農畜産課

1. 追肥

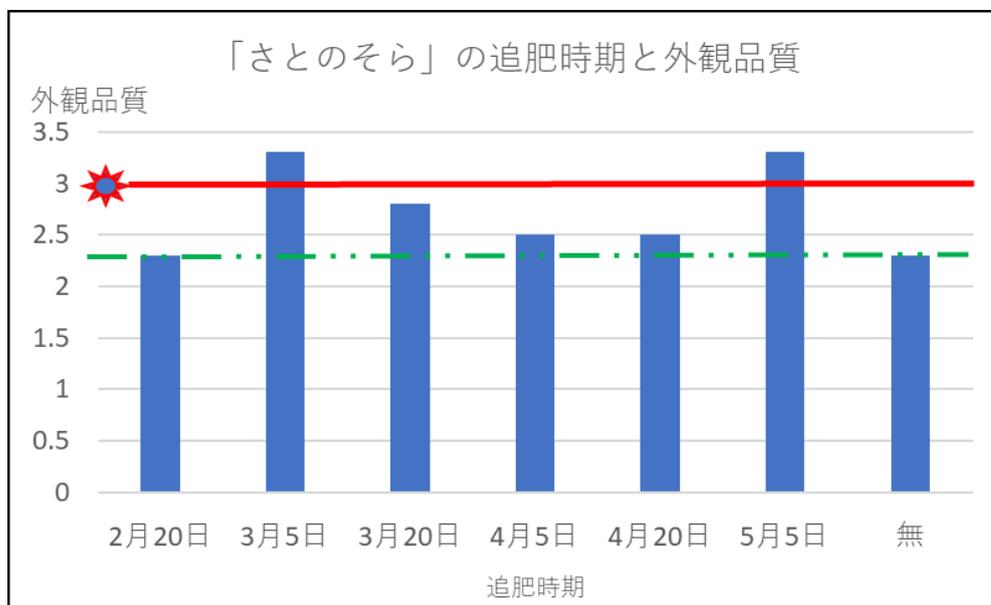
◎追肥は、莖立前の2月下旬に行いましょう。小麦はタンパク質含量を高めるために、できるだけ行ってください。

◎「ゆめかおり」では2月下旬の追肥の他に、赤かび病防除時に尿素を混合し、二回目の追肥を行いましょう。

◎「シュンライ」(大麦)では過剰な施肥は品質低下の原因となるため、生育状況によっては追肥を加減してください。

追肥施用量の目安(10a 当り)

品種名	窒素成分	施用例
さとのそら きぬの波	2～3 kg	硫安を10～15 kg
ゆめかおり	一回目 2～3 kg	硫安を10～15 kg
	二回目 尿素4～8%溶液を散布(赤かび病防除時に尿素を混合)	
シュンライ	2～3 kg	硫安を10～15 kg



※出典:群馬県農業技術センター

2. 麦踏みの実施

☆麦踏みの効果☆

- ①耐寒（干）性を高める
- ②茎の早立ち（凍霜害）の防止
- ③分けつ数の増加
- ④倒伏の軽減

- ◎12月下旬の3～4葉期から茎立ち前（2月下旬頃）までに3回は必ず実施しましょう。
麦が1～2葉のときは、かえって生育を阻害するため麦踏みを避けましょう。
- ◎2回目以降の麦踏みは、前回から10～14日以上間隔を空けて行いましょう。
- ◎土壌が凍結しているときや湿気ている場合は作業を避けます。土が締まりすぎてしまい生育が阻害されます。
- ◎中期処理剤を散布した前後は、薬害の発生を避けるために2～3日は間隔を空けましょう。
- ◎麦が徒長ぎみのときは過繁茂を抑制するため1～2回多く行いましょう。

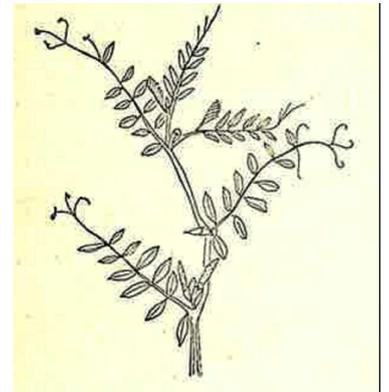
3. 雑草防除

（1）難防除雑草の解説

◆カラスノエンドウ

○被害

- ①畦畔などの日当たりの良い所に多く、そこから畑・水田に侵入して害草となります。
- ②水田では排水良好な所で発生が多く見られます。
- ③麦播種後、12月頃から発生しますが、10cm前後の深い土中からでも出芽可能であるため、発生が不均一で長期にわたります。
- ④粒が大きく、比重も麦とほぼ同じであり混入すると選別しにくく問題となっています。



○耕種的防除方法

・水田への蔓延を防ぐためには、畦畔の草刈りを徹底します。

○生育期除草剤散布による防除方法

- ①カラスノエンドウは、まず適期防除が大切です。土壌処理除草剤散布後、麦の生育中に発生した場合に対処するには、防除適期はカラスノエンドウの2～3葉期であるため、この時期を逃さず除草剤を散布しましょう。
- ②麦の生育中に散布する除草剤はバサグラン液剤が効果的です。

◆ネズミムギ・カラスムギ

○被害

- ①ネズミムギ・カラスムギの被害が著しい圃場が目立ち、生産物への混入や減収などの被害が目立っています。

○耕種的防除方法

- ①発生量が少なく、種子の成熟前に抜き取りが可能であれば確実に抜き取りましょう。抜き取った株は種子を残さないために圃場外に持ち出します。
- ②水田では、夏期湛水管理を行います。カラスムギの場合は20日間、ネズミムギの場合は60日間を目安に湛水状態を保ちます。
- ③畑地の場合には、麦の収穫後にプラウ耕を行い、雑草種子を土中深くに埋め込みます。

◆ヤグルマギク

○被害

- ①多発すると小麦が押し倒されて収穫が困難になることもあります。種子の混入も問題となります。
- ②麦類収穫時のヤグルマギクの草丈は麦類に比べて高く、生育競合などにより麦類の減収率は5～9割に及ぶこともあります。

○耕種的防除方法

- ・水田であれば60日間の夏期湛水管理により種子はほぼ死滅します。

○生育期除草剤散布による防除方法

- ・生育期茎葉処理剤ではバサグラン液剤の効果が高く、上記の土壌処理剤との体系処理で雑草の3～4葉期までに散布しましょう。

(2) 麦栽培で散布する生育期除草剤の例

雑草の発生状況	薬剤名	使用量 (/10a) (希釈水量)	散布時期	使用回数
広葉雑草のみ	エコパートフロアブル (特にヤエムグラ)	50～100ml (100L)	節間伸長開始期まで (広葉雑草2～4葉期) 但し収穫45日前まで	2回以内
	バサグラン液剤 (特にカラスノエンドウ)	100～200ml (70～100L)	生育期(雑草の3～6葉期まで) 但し小麦では収穫45日前まで、大麦では収穫90日前まで	1回
	MCPソーダ塩 (特にカラスノエンドウ)	200～300g (70～100L)	幼穂形成期但し、収穫45日前まで	1回

※農薬の登録内容 令和7年1月1日現在

※注意点 農薬はラベルを確認して使用しましょう。

※MCPソーダ塩は分げつ抑制作用があり、また幼穂形成期以降の散布は薬害の危険性があることから必ず適期に散布しましょう。小麦での散布時期は2月下旬～3月上旬です。大麦は薬害の危険性があることから使用を控えましょう。

麦類赤かび病について

病原菌

数種類の菌が知られていますが、いずれもフザリウムと呼ばれる糸状菌（カビ）の仲間です。この菌は多犯性であり、イネ科植物のみならず大豆なども侵します。

病気の様子

主として穂に発生します。この病気の症状は、開花7～10日後から見られ、穂の一部または全体が赤褐色となり、穎（ムギ粒の外側を覆っている殻）の合わせ目や穎の付け根などにピンク色のカビが発生します。この症状は穂がまだ緑色のうちは、はっきり分かりますが、成熟が進むにつれて段々と分かりにくくなり、成熟期近くになると、この病気はかなり判別しにくくなります。



発病しやすい条件

(1) 気象条件

「出穂前後の気温が高く（20～27℃）、降雨がある」ときに感染率が高まります。また、「感染後も度々降雨にあう」と病気が広がりやすくなります。

(2) 肥料条件

窒素肥料を多く入れすぎたり、遅い時期に追肥を行ったりすると、この病気が発病しやすくなります。また、リン酸やカリは、発病を抑制する傾向があります。

(3) 穂の感染期間

成熟期まで感染しますが、開花期～その後10日頃（出穂後約2週間）が最も感染しやすい時期です。

感染経路

ア 一次感染：子のう胞子による感染

イネわら、ムギわら
イネ刈株、枯死したイネ科雑草

→4月中旬から子のう胞子が形成され始め、5月上旬には子のう胞子の形成が最も盛んとなる。

↓
降雨後に子のう胞子が放出
(曇天多湿時に多い、22～翌日6時頃が飛散のピーク)

↓
ムギ穂に達して感染（主として雄しべや花粉）

イ 二次感染：分生胞子（ピンク色のカビにできる胞子）による感染。

病穂にできた分生胞子→雨滴によって流下または風で飛散して二次感染

※穂が感染した後気温が25～30℃で多湿の場合は3日以内に病気の症状が現れる。

被害の様相

(1) 収量

激発すれば屑粒となって収量は皆無となり、通常の発生でも粒が小さくなり減収します。また、種子の発芽が悪くなります。

(2) マイコトキシン

麦類を汚染する DON (デオキシニバレノール) などのカビ毒を総称してマイコトキシンと呼びます。赤かび病菌は数種類のマイコトキシンを生産します。マイコトキシンは人畜に有害であり、中毒症状を引き起こします。

防除対策

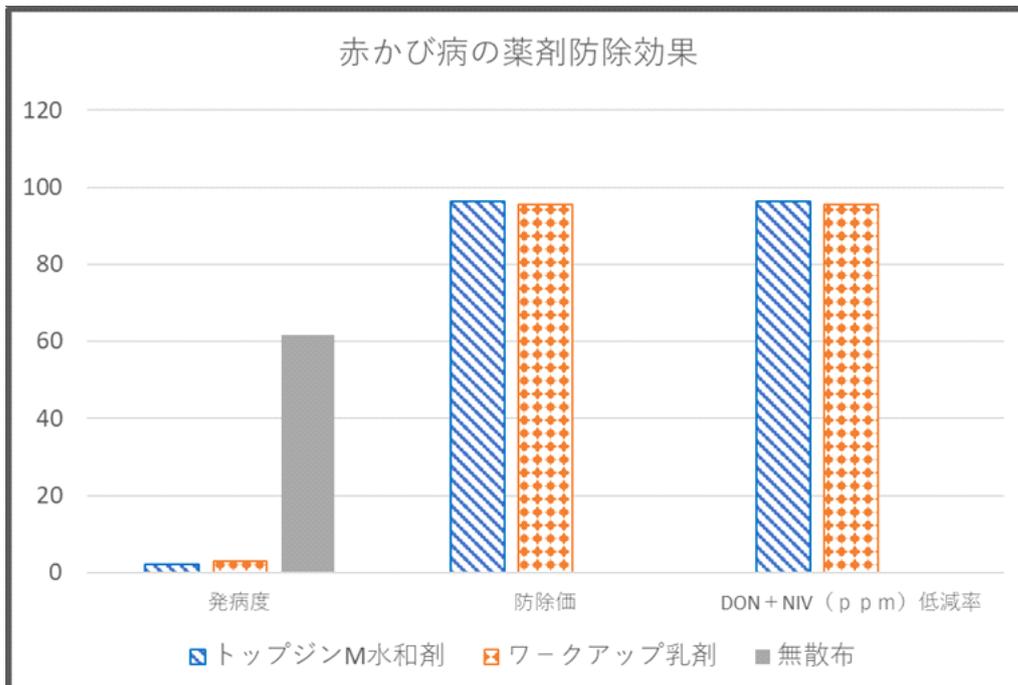
- (1) 発生ほ場から種子を取らないようにしましょう。
- (2) は種時に種子消毒を行うか、消毒済みの種子を播きましょう。
- (3) 稲・麦わらは感染源になるので、ほ場から持ち出すか、すき込んで土の表面に露出させないようにしましょう。
- (4) 畦畔のイネ科雑草も感染源となるので、草刈りを十分に行いましょう。
- (5) ほ場における防除
赤かび病の防除適期は、小麦では開花始期（出穂5～7日後頃）とその10～20日後頃、六条大麦では開花始期～盛期（穂揃期）とその10日後頃です。
できるだけ、二回防除を行って下さい。

麦類赤かび病に対する防除薬剤

薬 剤 名	使用倍率	使用時期	使用回数
トップジンM水和剤	1000～1500倍 〃	大麦収穫30日前まで 小麦収穫14日前まで	1回以内 2回以内
ワークアップフロアブル	2000～3000倍	収穫7日前まで	3回以内

※農薬の登録内容:令和7年1月1日現在

参考1 赤かび病防除薬剤の効果



※出典:九州沖縄農業研究センター